

2024年9月22日 聖霊降臨節 第19主日礼拝メッセージ

「ヨルダンの向こう側」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 10章 31-42節

皆さんは疲れた時、あるいはストレスがたまってどうしようもない時、どうされますか。私はこの間、職場で若い同僚から「水谷さんはあんまり愚痴とか言わないですけど、ストレスとか溜まらんのですか」と聞かれたので、「溜まらんことはないわな、まあグチグチ言うのは自分でもあんまり好きじゃないし、聞いている方もしんどいかもしれないので、あんまり言わんようにはしてるんだけど、それでもいろんなモヤモヤというかストレスはやっぱり溜まってくるわけで、でもあんまり長々とそういう嫌な気持ちとかモヤモヤは持ち越さんようにしてるかな、暴飲・暴食・ふて寝みたいな、そういうので乗り切ってるかな」みたいな話をしておったんですけど、皆さんもちょっとしんどくなって来た時なんかは、例えばどこか旅行へ行っ、温泉でゆっくりと広い湯船に浸かり、上がって冷たいビールでも飲みながらごろんと寝転がる、ということもされることもあるかもしれない。あるいは肉体的な疲労よりも精神的に疲れきったとかいう場合には、ひたすら寝るとかおいしいものを腹いっぱい食べる、遠くまでドライブ、思い切ってじゃんじゃん買い物をするなど、いろいろと自分流のストレス解消法があることかと思えます。またテレビなどでも、様々なストレス解消法、あるいはストレス解消になりそうなネタが毎日のように紹介されています。穴場の温泉宿、行列が絶えないような評判の料理屋、最新の観光コース・デートスポットなどなど。

そのように、私たちの生きるこの現代はいつからか、大変ストレスがかかりやすい世の中になってしまっています。動物園の動物だって、檻に囲まれた暮らしを強いられてストレスを感じているわけで、熊さんなんか檻の中を行ったり来たりしているわけです。ストレスによって、猿やいろんな獣だって禿げ上がってしまったりするわけですし、かごの鳥、金魚鉢の金魚も一緒にいる仲間をいじめ殺したりするくらいですから、職場や学校の人間関係、また家族関係とか、あるいは学歴や職歴、近所の評判などという現代の目に見えない檻に押し込まれて暮らすことを強いられている私たちのある者が、それに耐え切れずに心身ともに病気になってしまったり、爆発して様々な事件を起こしたりするのも、当然の帰結といえるのかも知れません。

現代の凡人でしかない私たちはそうなのですが、例えば人として肉体を持って生まれた神であるキリストはどうだったのでしょうか。神の子ですから、そんなものは突き抜けてしまっていたのでしょうか。ストレスなどとは無縁だったのでしょうか。

ある説によりますと、「イエス・キリストの血液型は O 型だった可能性が高い」ということらしいです。有名な「トリノの聖骸布」、イスカリオテのユダの裏切りによって逮捕され、大祭司や総督ピラトのもとで暴行を受け、十字架を担がされて引き回され、ゴルゴタの丘で十字架につけられて死んだイエス・キリストの、血だらけの遺体を包んだ布と言われるものが、「聖遺物」、つまりキリストの聖なる遺品として存在するわけですが、ある時にその布に付着している血液を調べると、どうやら AB 型だったようです。あれ、O 型じゃないやん、なんで O 型とか言うの。それはね、O 型の人には全ての血液型の人に輸血してあげられるけれども、輸血してもらえるのは同じ O 型の人しかいないわけです。つまり「人に自分を与えるばかりで人から受けることがほとんどなかったキリストの血液型は、きっと O 型だったはずだ」という冗談でした。しかし、そのようにまさに「全てのものを与えし末、死のほか何も報いられて～♪」と讚美歌にも歌われているようなキリストに、本当にストレスなんてなかったのか。確かに神の子ではあるけれども、人として生まれた方である以上、いつもいつも教えを与え、励ましを与え、慰めを与え、癒しを与え、気付きを与え、希望を与え…与えてばかり、求められてばかりで、返ってくるものと言え、力を与えられた者からの感謝の言葉や、「ナルドの香油」のような愛の贈り物などもあるにはありましたが、ほとんどは誤解による悪評や中傷、敵意、策略、暴力など。ストレスが溜まらんはずがない。

イエス・キリストは、福音書の中で何度となく怒っている姿が伝えられています。ある時には自分の語る話を全く理解しない弟子たちに向かって「まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか」と激しく怒っていました。またある時には、エルサレム神殿が商売の家・強盗の巣になってしまっている光景を目の当たりにして、売買していた人々を追い出したり、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返したりして暴れました。あるいは、エルサレムを見ながらイエス様はその不信仰を思って泣いたりしているわけです。イエス様も神の国を述べ

伝えようとするけれども、なかなか人々に伝わっていかないという歯がゆさがあったのでしょ。

今回の箇所においても、イエス様は全く自分のことをわかってくれない人々に対して叫びます。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか」。私が何か殺されなければならないようなことをしているのか。私の何が気に入らんのだと。そして続けて言うのです。「もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう」。

キリストはいつも「信じなさい」と言っていました。会堂長ヤイロの 12 歳になる娘が死んだ時も「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われていました。枯れたいちじくの木を前にして「神を信じなさい。はっきり言うておく。誰でもこの山に向かって海に飛び込めといい、少しも疑わず、その通りになると信じるならば、その通りになるのだ」と言われました。ヤコブの井戸で出会ったサマリアの女性に対しても、「婦人よ、私を信じなさい」と言われ、ご自分がメシアであることを証しされました。しかし今日のこの場面においてイエス様は、「もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。」と言うのです。いつも「ただ信じなさい」と力強く言っていたイエス様らしくない、少し消極的な言葉のように聞こえてきます。何だかとてもかわいそうに思えてきます。

かつて、AKB48 の総選挙において、当時の人気投票第 1 位だった前田さんが、「私のことが嫌いでも AKB のことは嫌いにならないでください」みたいなことを言っていたことが、なんだかそのことが思い出されて、前田さんもすごく辛かったんだろうなって思うと同時に、イエス様も辛かったんじゃないでしょうか。そしてイエス様は、それでもなお彼を捕らえようとするユダヤ人たちの手を逃れて、いずこかへ去っていかれるわけです。

イエス様は一体どこへ向かったのでしょうか。それが 40 節に記されています。「イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行っ

て、そこに滞在された」。このたった1節だけの記述ですが、この記述は非常に大きな意味を持っています。イエスはユダヤ人たちの手を逃れて、ヨルダン川の向こう側、洗礼者ヨハネが最初に洗礼を授けていたところ、ベタニアという町に向かったのです。それはすなわち、イエス様の宣教活動の出発点にイエス様が再び戻っていった、引き返していったということを意味しているのです。

多くの神学者や牧師たちも同様に言っているのですが、このささやかな記述が私たちに語りかけているのは、私たちが日常の慌しさに心身に疲れを覚える時があるように、私たちの信仰も、時に弱ってしまうことがあるということ、そして、私たちが日常生活に疲れを覚えた時に、しばしばそこから離れて心身を休める必要があるように、私たちの信仰が弱ってしまった時にも、私たちはしばしば日常から離れて信仰を休める必要、心を休める必要があるということです。今日のキリスト・イエス、どんなにがんばっても全く人々に理解されず受け入れられなかったイエス様は、しばらく自分の活動を離れてまた自分の出発点に戻り「『ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことはすべて本当だった』とそこでは多くの人がイエスを信じた」というように、ヨルダン川の向こうで再び、自分を受け入れてもらえる体験、話を聞いてもらえる体験、認めてもらえる体験、信じてもらえる体験によって、また自分の宣教の現場へと戻っていく力を与えられたのではないか。少しへこんでいたイエス様は、ヨルダンの向こう側へ退き、再び自分の出発点へ立ち戻ることによって、大きく力づけられたのであろうと想像するわけです。

私たちそれぞれも、いろいろなところでいろいろな形の日常の営み・働きをしているわけですが、私たちも時には、もう一度自分の最も基本のところ・自分の出発点に戻る必要・心がざわつくところからいったん離れて、静かなところに引き返して力を再び回復していく、そういう機会を持つ必要があるように思います。願わくはそれぞれの日常における魂の疲れにとって、気晴らしのための旅行などはもちろんですが、例えばその他にも密室における祈りの場や、あるいは私たちの守っているこの礼拝のひと時が、そのような疲れた魂に力を与え、疲れた心が力を回復する場、イエス・キリストにとっての「ヨルダンの向こう側」のような場になれば、と願っています。